

第09講 大きな「品詞」と「文役」のまとめ

第06講と第07講で、「句」と「節」の学習をし、「詞」の形態が出そろいましたので、本講では、「品詞」と「語句節」、それらと「文役」との関係をまとめてみます

既習のように、「句」は「成句詞」によって「形容句」「副句」がつくられ、「節」は「成節詞（名節詞と副節詞）」によって「名節」「副節」がつくられるのですから、「成句詞」や「成節詞」は、新たに大きな「名詞」「形容詞」「副詞」（略して「名形副」）をつくるための「品詞」であることがわかります（「品詞」の拡大と「手段詞」）

すなわち、「成句詞」による「形容句」「副句」や「成節詞」による「名節」「副節」は生来的な「名形副」ではなく、したがって、「成句詞」や「成節詞」はつくられた「名形副」のための「手段的な品詞」なのです（本書では、「手段詞」と命名します）

その他の「手段詞」としては、「形容節」をつくる「構成来形容節詞（関係代名詞）」と「役外来形容節詞（関係副詞）」があります（「第10講」「第11講」参照）

また、性質的には多少異なりますが、「推量」的に文意を整える「助動詞」や、『文。』「句」「語」の関係を整える「等位接続詞」を「手段詞」に含めて考え得ます

ここで、確認しておきたいのは、『文。』というものは、①「自動詞」「他動詞」により「名詞」「形容詞」が操られ、②「副詞」が彩りをそえるということと、③本来的な「名形副」の「単語」である「名語」「形容語」「副語」以外に、つくられた大きな「名形副」（「句」「節」）でも構成されているということです

『文。』を構成する「品詞」には、「名詞」「自動詞」「他動詞」の他に、「名詞」の「状態」を示す「形容詞」があり、「場面状況」を設定する「副詞」があります。そして、「名形副」のそれぞれが、「詞」の形態として、「語」「句」「節」を備えており、以下の表のように9個の「品詞」の種類・形態が存することになります

次に、それらが『文。』中でどのように働いているかが問題となるのです（「文役」の観点）

「品詞」と「語句節」		「詞」の形態		
		（単）語	句	節
品詞 の種類	名詞	名語	名句	名節
	形容詞	形容語	形容句	形容節
	副詞	副語	副句	副節

「品詞」のまとめ

総称	品詞称	各称	役割
「品詞」	「名詞」	「名語」	「主目補」になる
		「名句」	
		「名節」	
	「形容詞」	「形容語」	①「補役」になる
		「形容句」	②「名詞修飾形容詞」になる
		「形容節」	「名詞修飾形容詞」になる
	「副詞」	「副語」	「場面状況」を設定する 「役外状況族」
		「副句」	
		「副節」	

「手段詞」のまとめ

「手段詞」	役割	具体的英単語例
「成句詞」	「名語」「名句」「名節」を後属させて、「形容句」「副句」をつくる	i n , a t
「成節詞」	『文。』まるごとを「名節」「副節」にしてしまう	t h a t , b e c a u s e
「構成来形容節詞」 (「関係代名詞」)	『文。』中の「構成要素の名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	t h a t , w h i c h
「役外来形容節詞」 (「関係副詞」)	『文。』中の「副句」の「後属役名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	w h e n , w h e r e
「助動詞」	『文。』の伝えるべき内容に、断定を避け、推量的変化を与える 「役外推量族」	c a n , m a y
「等位接続詞」	『文。』と『文。』をつなぐ 「節」と「節」をつなぐ 「句」と「句」をつなぐ 「単語」と「単語」をつなぐ	a n d , b u t

「手段詞」に対して、「名詞・形容詞・自動詞・他動詞（名形自他）」を「構成詞」と呼ぶべきでしょう

「文役」の確認

『文。』中における、「名詞」「形容詞」の「役割」の総称を「文役」といい、具体的な役割として、「主役」「目的役」「補役」の3種があり（「役称」）、そこで、「語句節」の3種がそれぞれ働くので、9種類の「役割名」が存在します（「各称」）

『文。』中で具体的に活躍している「名詞」「形容詞」とからめた呼称として11の「構成称」がありまして、「主役」と「目的役」は「名詞」しかないので「名詞」とのからみしかありませんが、「補役」の場合は「名詞」と「形容詞」がなれますので、「名詞」とのからみからくる呼称と、「形容詞」とのからみからくる呼称の2種があります（「形容節」が「補役」になることはないので「形容補節」という呼称はありません）

「文役」のまとめ

総 称	役 称	各 称	構成称
「文役」	「主 役」	「主 語」	「名主語」
		「主 句」	「名主句」
		「主(役)節」	「名主(役)節」
	「目的役」	「目的語」	「名目的語」
		「目的句」	「名目的句」
		「目的節」	「名目的節」
	「補 役」	「補 語」	「名補語」「形容補語」
		「補 句」	「名補句」「形容補句」
		「補 節」	「名補節」「—」

一般に、狭小矮小的に「主語」「目的語」「補語」と言われていますが、「詞」として「語」「句」「節」がありますので、上位概念として、「主役」「目的役」「補役」と呼びます
上記の表中で、「主役になる節」という意味の「主(役)節」に「(役)」が入るのは、『文。』の構造上、「副節（従属節）」に対して本体の方の「節」を「主節」といいますので、それとの区別のためです（本書では、「副節」に対して「本節」といいたいところですが）

また、「形容節」は先行する「名詞」（「先行詞」）を修飾するだけで（「形容節詞（関係代名詞・関係副詞）」、「第22・23講」参照）、「補役」になることはないので、「形容補節」という「構成称」はありませんので、表中では、「—」と表示しました

「補役」になる「節」は「名節」しかありません（ここで展開的な注意ですが、「名節」が「補役」となる場合は、概念的なものから具体的なものまでの高度な「内容説明」となりうることに留意してください（「言い換え」）（現代文読解の要諦です）

『「品詞⇔文役」確定表』

『詞役表』

品 詞	内 容	なれる「文役」
名 詞	「もの」や「こと」をあらわす	「主役」「目的役」「補役」
自立動詞	「主役」自体の単独の動作をあらわし、「補役」を必要としない「自動詞」	「自立文型」の「自動詞」
補完動詞	「主役」の「職業・地位・内容・概念・観念(名補)」や「状態・性質(形補)」を『文。』として説明するにあたり、「補役」と「主役」を結びつける「自動詞」	「補完文型」の「自動詞」
関渉動詞	「主役」の動作のうち、他者を巻き込み、「関与・干渉」をあらわす「他動詞」	「関渉文型」の「他動詞」
形容詞	①「中心主語」(「中心目的語」の場合もある→第21講参照)となる「名詞」の「状態・性質」を説明する	①「補役」
	②その他「名語」一般を「修飾」する	②「名詞修飾形容詞」 役外修飾族
副 詞	場面状況を設定し、「動・形・副・文」を修飾する	役外状況族

『役詞表』『逆表』

文 役	内 容	なれる「品詞」
主 役	『文。』中の動作・状態の中心となる主体	「名詞」
目的役	「関渉動詞」の「主役」の動作の対象物(客体)	「名詞」
補 役	「主役・目的役」の①「職業・地位・内容・概念・観念」や、②「状態・性質」をあらわす	①「名詞」 ② 形 容詞

第06講の「句」と第07講の「節」をよく認識・理解し、「句・節」が大きな「品詞」になり大きな「文役」となっていくことを完全に把握してください

補足です

「成句詞」の「後属役」のまとめ

「成句詞（前置詞）」の 「後属役」	各 称	なれる語句節
	「後属語」	「名語」
	「後属句」	「名句」
	「後属節」	「名節」

さらに、補足です

「倒置」について

「倒置」とは、作文者が、強調したい「語句節」がある場合、その強調したい「語句節」の位置に変化をもたらすことです

主に、「目的役」「補役」「副詞」を「文頭」に持ち出すことをいいます

この場合の多くは、その影響から、「主役」と「動詞」の位置にも「倒置」が生じます（「主語＋動詞＋倒置語句節」ではなく「倒置語句節＋動詞＋主語」と逆転します）

全体的に、通常の語順に変化が生じるのです

ここまでの学習で、『文。』の「構成要素」は「語句節」からなる「名詞」「形容詞」と「自動詞」「他動詞」ということであり、これらを「名形自他」と略し、「構成詞」と呼称すべきことに共感いただけましたでしょうか

本書では、「成句詞」による新たな「形容詞」「副詞」の創設や、「成節詞」に「形容節詞」や「動詞の活用（第10講以下参照）」により、『文。』が「名詞化」「形容詞化」「副詞化」していくことを略して、

「名化」「形容化」「形化」「副化」「形副化」「名副化」「名形副化」等と表現しますので、臨機応変に対応してください

次講以降では、話を変えて、着眼を大きくして、「動詞」の「活用」と「名形副化（物態況化）」ということを考えていきましょう

本稿旧版では、次講と次々講で、「節つながり」ということで、「形容節（関係代名詞と関係副詞と言われているもの）」についてみていましたが、もし「形容節」の講で挫折する可能性を考えると、構造や構成要素について全て終わらせたあとで、じっくり「形容節」と「仮定法」に取り組んでいただこうと思い、ほぼ最後尾に移しました
形容節に興味がある方は、先に第22・23講を読んでもかまいませんよ